

長崎県感染症発生動向調査速報

平成27年第33週 平成27年8月10日（月）から平成27年8月16日（日）

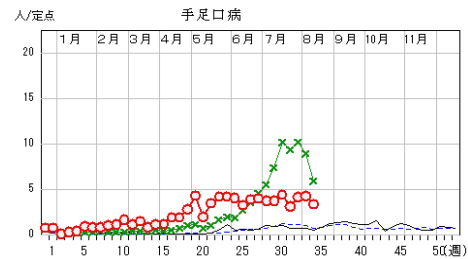
☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

(1) 手足口病

第33週の報告数は149人で、前週より38人少なく、定点当たりの報告数は3.39であった。

年齢別では、1歳（51人）、2歳（38人）、1歳未満（21人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、五島保健所（9.25）、壱岐保健所（8.00）、上五島保健所（6.50）が多かった。

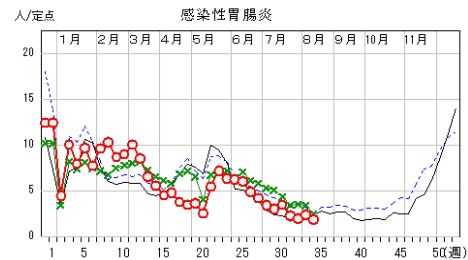


(2) 感染性胃腸炎

第33週の報告数は82人で、前週より23人少なく、定点当たりの報告数は1.86であった。

年齢別では、3歳（14人）、10～14歳（12人）、1歳（11人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、上五島保健所（5.00）、佐世保市保健所（4.00）、県北保健所（3.33）が多かった。

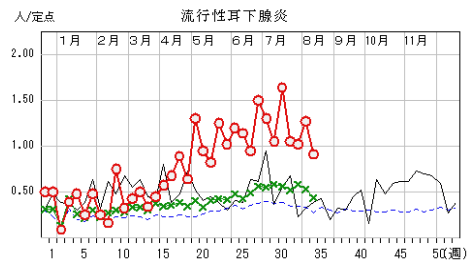


(3) 流行性耳下腺炎

第33週の報告数は40人で、前週より16人少なく、定点当たりの報告数は0.91であった。

年齢別では、6歳（8人）、5歳（7人）、3歳（6人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県南保健所（2.00）、佐世保市保健所（1.50）、西彼保健所（1.50）が多かった。



○ 当年(長崎県) 前年(長崎県)
× 当年(全国) 前年(全国)

☆上位3疾患の概要

【手足口病】

第33週の報告数は、前週より38人減少して149人となり、定点当たりの報告数は3.39でした。県下全域から報告があがっており、五島地区9.25・壱岐地区8.00・上五島地区6.50は警報レベル「5」を超えていますので注意が必要です。

本疾患は、初夏から夏場にかけて流行し、口腔粘膜および四肢末端に現れる水疱性発疹を特徴とする乳幼児に多いウイルス性疾患です。感染経路は糞口感染が主体で、飛沫感染や水疱内容液からも感染します。急性期に最もウイルスの排泄量が多く、回復後も2週間から4週間程度は、便中にウイルスが排泄されますので、保護者は乳幼児に手洗いやうがいを励行させ、感染防止に努めましょう。原因ウイルスの種類によっては、手足口病とともに無菌性髄膜炎や脳炎を併発することもありますので、早目に医療機関を受診させましょう。

【感染性胃腸炎】

第33週の報告数は、前週より23人減少して82人となり、定点当たりの報告数は1.86でした。壱岐地区・対馬地区以外の県下全域から報告があがっています。上五島地区5.00は他の地区より報告数が多いので、今後の動向に注意が必要です。

本疾患は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くを乳幼児が占めています。原因はノロウイルスをはじめとするカリシウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に乳幼児には、手洗いの励行とともに、体調管理に注意して感染防止に努め、早目に医療機関を受診させましょう。

【流行性耳下腺炎】

第33週の報告数は、前週より16人減少して40人となり、定点当たりの報告数は0.91でした。上五島地区・対馬地区以外の県下全域から報告があがっています。県南地区2.00は他の地区より報告数が多いので、今後の動向に注意が必要です。

本疾患は2週間から3週間の潜伏期（平均18日前後）を経て発症し、片側あるいは両側の唾液腺の腫脹を特徴とするウイルス感染症であり、通常1週間から2週間で軽快します。最も多い合併症は髄膜炎であり、その他髄膜脳炎・睾丸炎・卵巣炎・難聴・聾炎などがみられることがあります。感染経路は接触感染や飛沫感染ですが、その感染力はかなり強いため注意が必要です。ただし、感染しても症状が現れない不顕性感染もかなりみられます。本疾患およびその合併症の治療は基本的に対症療法です。

予防するにはワクチンが唯一の方法であり、有効な抗ウイルス剤が開発されていない現状においては、集団生活に入る前にワクチンで予防しておくことをおすすめします。

★トピックス：蚊媒介感染症に関する蚊の生息調査を実施しています

本県では、デング熱などの蚊媒介感染症のまん延を未然に防ぐために、長崎市の平和公園や佐世保市の佐世保公園において蚊の生息調査を実施しています。本年度は、佐世保公園にて7月30日に、平和公園にて8月11日に第1回目調査を実施しました。

方法は人囮法（ひととりほう）を用いてヒトスジシマカを採取し、その後ウイルスの保有を調べる為の遺伝子検査を実施しました。その結果、採取したヒトスジシマカより、デング熱を引き起こすデングウイルス、およびチクングニア熱を引き起こすチクングニアウイルスの遺伝子は検出されませんでした。

まだしばらくは蚊の活動が活発な時期になりますので、虫よけ剤を使用する、肌の露出を避けるなど蚊に刺されないよう注意しましょう。

（参考）長崎県医療政策課 蚊の生息調査 [PDFファイル/53KB]
<https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2015/08/1439795185.pdf>

（参考）長崎県医療政策課・環境保健研究センター 人囮法による蚊の密度調査方法 [PDFファイル/126KB]
<http://10.1.10.2/kohocms/wp-content/uploads/2015/08/1440052333.pdf>

